

“天安門騒動”を語る



対談中の中嶋氏(右)と高木氏

出席者

中嶋 嶺 雄

東京外国語大学助教授

高木 健 夫

周恩来なきあとの中国に何か起っているのではなからうか。“天安門事件”とはいったいなんだったのだろうか、など……、新聞雑誌報道からは知られなかつた、中国をめぐる諸問題とその真相を、中島氏と本誌同人の高木健夫氏にじっくり語っていただいた。

高木 中国は去年の五月に平壤に行くときに北京に滞在したのがいちばん最近なんです

よ。その前はその前の年、両方とも中国のほうはトランジット(通過)で招かれざる客だったんです。

中国は、やっぱり文化大革命のいろいろな動きが収まって定着し、よくなっているというふうにみんな、評論でも書いておりましたけれどもね。私は、それは周恩来首相がいるような跳ね返りやなんかを抑えるし、収まったような形で彼の政治力で持っていたというふうにしかならないんですがね。で、こんど場合はどうもその抑えがなくなったので噴きだしてきた。そういうところがあるんじゃないかと思われまます。

それからこんどの天安門事件はね、中国のいわゆる政治的でない人民、いまの中国のシステムではおかしいのだけでも、政治的でないというか……あるいは、むしろ非常に政治的というか、そういう人民の本当の気持というものがあそこへ出てきたんじゃないかと。それからもう一つは、文革派と称される人たちの、いわゆる赤いビュロクラシーといいますか、そういうものが人民にはとても耐え難いものがあつたに違いないという気持があつたのではないかと、あの事件を見て感じるんですよ。

ぼくは、大宅壮一なんか、いつも「お前の考え方は中国人と一緒だ」なんていってひらはたんなる架空会見じゃありませんよ。それ、ぼくの懺悔なんです。それは、「周恩来首相が亡くなったけれども、その後継者はだれでしょうか」それは一議にも及ばず「鄧小平でしょう」と、こういってなんです「それはどういうことか」というからね、それは鄧小平のいままでの経世と、いわゆる周恩来的な中庸の政治的なバランス、感覚というものが、それからもう一つは第二野戦軍当時から長征の前から、かれは軍の政治委員をやつてましたね、第二野戦系統。林彪は第四だったかな……。

中嶋 第四ですね。

高木 で、第二野戦系統の政治委員をずっとやってきて、こんどは、総参謀長でしょう。そうしたら軍は完全に握っているわけですからね。ぼくらみたいな外からの観察者です。いまの中国で政治の路線はそういう形で彼が押えている、実務派で押えている、それから軍のバックアップもある。おまけに彼が育ててきた、こんどの北京の第二司令員かな、持ってきたあれが彼の子分でしょう。

中嶋 そうです。

高木 ね、そういうことを考えると、彼は軍も押えるという形になると、これは頭は鄧小平以外はないという感じだったわけですよ。ね。ともかくこういうふうな説明をしたわけ

やかされていたんだけど、こんどの場合も中国の庶民の気持ちに立つと、ぼ清明節に当たって、そして周恩来をあれだけ敬慕した人民の気持をです。それが文革のヤング官僚の官僚主義とでもって花輪を撤去されたとかなんかしてメチャクチャにされたことが、ぼくにもカチンときてね、いままでは随分いろんなことをいわれながら、一生懸命支持してなんとかいい方へ行けばいいと思いつつながら希望的観察を混えてものをいつてきたんだけど、でも、こんどの事件ではホントにカチンときまして、こんなことじゃ、というふうな気がしてきたんですよ。まアいまのところの気持はそういうところですね。

中国ではいま何が起っているのか

中嶋 ぼくは、文化大革命のとき高木先生と一緒に中国を旅行したことがありますので、その当時の高木先生の中国にたいする御印象に照らして、いま先生のおっしゃったことを非常に感慨深くうかがったのですけれども、どうもあれですね……文革派のいまの政治的なあり方ですが、いま赤いビュロクラシーとおっしゃったんですけれども、やはり政治をあまりにも私物化し過ぎていっているのでは

ないでしょうか。このことに対する中国民衆のあいだの不信感みたいなものはからずも出てきた。それに引き替え周恩来はある意味での国家というものを、常に考えてきた政治家ではないかと。つまり周恩来の政治は非常に公的なイメージが強いんですよ。内政にせよ、外交にせよ、いつも彼は粉砕努力したわけですよ。つまりある種の公的な国家的使命感にいつも裏打ちされて彼の行動が決まっていた。ですからあるときはオポチュニストになるときもあつたと思えますね。それと同時に中庸の道を行くとか、バランスである、折衷主義だったとか、そういうことですね。

いわばこういうことに引き替え、最近の毛沢東路線は、どうも毛沢東側近体制というものがあまりにも政治を私物化してきたんじゃないかという点に對する、大衆の危惧なり、不満ね、それが周恩来批判にまでいったら大変だという気持と裏腹にあるんじゃないかという気がしますね。

高木 ぼくは、地方新聞のコラムに「天安門架空会見記」というのを書いたので、そ

です。そしてらこんどは華国鋒でしょう。それで「華国鋒の体制は一体どうでしょうか」というから、そのころはまだ軍が批判的だったですからね「わからないね」という話をしたんですよ。それにしても次の第一副首相にしてみただれにしても、とにかくそういう手続きというものはどこでどういうふうにしたのか、当時はちょっとわからなかったんだけれども、全国人民代表大会が開かれたかどうかもわからないし、中共中央委員会が開かれたとも聞かない。常務委員会かもしれないけど。それにしても、ちょっと憲法違反の疑いがあるんじゃないかというようなことをいって、しかしそうでなかったとしたら、毛沢東主席のあのカリスマ的な神通力というのはまだ衰えない。衰えないどころか、毛の「鶴の一声」で大したものだ、そういうことをいってたわけです。そしてらこんどは軍が鄧解任の決議を支持したというわけでしょう。そういうことを次から次とやっている、本当のインタビュアーが、いまになってみると全部架空会見なんだよ。「天安門架空会見記」というの……。

中嶋 軍が支持したり、地方の各級レベルの党委員会が支持しているんですけども、どこも今回の、いわば党中央の決定の後の支持は、やはり官製的といましようか、どう

も盛り上がりが少ないし、私は、今回の事件で意外に中国の民衆の中には政治に対する健全な感覚があるということ、逆に発見したんですがね。

高木 うんうん、そうですね。

反体制派は走資派はまだ根強く残っている？

中嶋 天安門前事件というのは、別に人を大勢殺したわけでもないし、つまり政治に対する不満というものをあいつ形で表明したというのは、一つのドラマとして見れば、意外と健全なことかもしれないですよ。そうすると、やはり私は、さっき申し上げましたような、毛沢東は偉大であったかもしれないけれども、いまの毛沢東政治なり、それを動かしているいわば側近グループ、特に江青夫人に対しての批判が出たということですね。これは意外に今回の事件の一つのポイントだと思えます。しかも周恩来が江青によって批判されたんじゃない、ということが沢山出てきた。清華大学、いわゆる走資派批判の急先鋒の学生たちにとつちめられる。それから文革派を批判するいくつかの詩やスローガンが出ましたですね。詩はいずれも筆筆で書かれていて、形式も完璧だったよ

うです。「人民日報」は「反動的文人」が事件に加わっていたと批判しましたが、かなり多くの反体制的知識人がまだ残っているんですね。その中に楊開慧という毛沢東の最初の奥さんですね、この人を偲ぶ、なんているのは痛烈な江青批判というほかないんですよ。これはあれでしょうか、高木先生、私は今回の事件を見て、中国の『人民日報』など、いわば表向きは頭教的なマスメディアは、毛沢東の私生活とか、女性関係とか、そういういわば人間的な側面については普通は何も触れませんが、タブーになっている。しかし意外に中国の民衆はいろいろなチャンネルによって、毛沢東の女性遍歴についてもくわしく知っているんじゃないか、と。

高木 知ってますね。

中嶋 ですから前夫人の賀士貞の名前を出さずに、楊開慧を出したことはね、賀士貞はまだ健在で生きているそうだし、それはあまりにも刺激が強過ぎる。だからいわば革命の烈士でもある楊開慧を偲ぶということによって、いわばもっと痛烈な江青批判をやったということにもなると思うのです。その辺はどうでしょう。

高木 そうですね。そういうことでも案外中国の民衆の中には、昔ながらの政治意識、

批評意識というものが残っているといえるわけですね。

中嶋 そうだと思っております。

高木 やはり中国の民衆の中でも、則天武后なんていうのは、いい女性、英雄的な女性ではないんですね。そういうイメージはないですからね。だから、それはダメだという批判の仕方というのは、やっぱりそれはもちろん江青に通じるし……。

中嶋 それと、とくに四月六日ですか『人民日報』の社説、それから十日の社説と事件の直後に『人民日報』は重要な社説をたて続けて出しているんですけども、どうも今回



中嶋嶺雄氏

重要な意味をもつ

“天安門事件”

の党中央は、まだ非常に守勢に立たされている「階級闘争の大方向をしつかりつかまえていえるれば、毛主席を守ることが出来る」というような調子ですね。どうも鄧小平をあいつ形で処断してみたものの将来的な不安を彼ら自身非常に痛感しているような気がするんです。

あるいは無視するということは十分あり得ると思えますね。ぼくは、どうもね、文革の意識や文革官僚というのが定着しない、まだ根もおろさないうちにこういうことになったということは、これはおかしいですよ。天安門事件などというのは、いままでの、中国の、あの中共の体制から考えたら絶対に考えられない事件です。これは、だからぼくらにとつてもたいへんショックな大事件でもあったし、それは同時にひっくり返すと、文革派、いわゆる中共幹部にとつてもたいへんなショックな事件だったと思うのですよ。それに対する対応のしかたというと、いささか弾圧的な押え込みだけでも、しかしあそこまでいったことは見事であったんで、しかし見事という以外に、あれ以外にやる手がなかった。やっぱり非常に考えなければならんことではないですか、あれは……。

高木 ありますね、非常にあると思うんだ。結局文革派で優秀な、官僚組織の中へ入って行った連中、これはソファに腰掛けて、会議をやって、自動車で歩くというようなそういう生活をしているわけでしょう。そういう生活してもう十年近くなるわけですね。だからこの連中は意識と実際の生活というものはかなり違うと思うのです。つまりもう官僚になつていくわけだ。官僚になつていくわけだ、周恩来や鄧小平ほどの革命歴というものは何もない。だから人民の意識や精神の働きというものを誤るといふこと、

中嶋 そうですね。とにかく事件が起こって、ああいうふうになると一つの選択を迫られた場合に、ああいう最後の手段しかなかったと思うのですけれどもね、いまおっしゃったように、ホントに私は未曾有の事件だと思いますね。とにかく中国に行って感じる毛沢東体制というのは、まさに水も漏らさぬものがあるわけですよ、雰囲気としては、ね。

高木 そうそう……。

中嶋 そういう中でああいうことをやった場合に、どういうふうな処断がされるかということは中国の民衆は十分知っているはずですよ。いままですつねに路線闘争、階級闘争といった試練、そういう政治的訓練を経ていくわけですから。それがしかも五千、一万じゃない。とにかく清明節のときは百万以上の人が集まって来て、そのうち五十万人ぐらいが残っていて、最後にその中の数方が暴動に加わったというんでしょう。これはある意味で……。

高木 大変なレジスタンスだよ、ありや。

中嶋 そうそう。それからそれだけで党中央に対する衝撃ですか、ショックは大きかったということですね。だから急きよ条件反射的にドロ細だと思うんですけどね、やったんですが、これは高木先生もおっしゃったように憲法違反でもあるし、党規約違反でもあるんですね。

それから意外と日本の新聞では指摘されないで、どうしてかと思うんですけどね、でもね、党第一副主席というふうなそういうポストは慣例としてはありました、いままでも。だけど党規約には全くいままではそういうポストは明記されていないんですよ。そこまでやっぱり華国鋒というものを急きよドロ細式

にせよ位置づけなければならなかったといふ、いわば中国のいまの政治的な危機の本質を表わしているような気がしますね。

それからこれに引き替えて私は、鄧小平は政治的には敗北していきましたけど、中国の民衆の中に非常に大きなものを残してしまつたということですね、鄧小平が最後まで妥協しなかったことの意味ですね。これは、文革派からいわせれば、悔い改めない反革命分子になるわけですから、しかしながら中国の民衆は政治的な訓練が出来ておりますので、走資派といつても資本主義の復活とは必ずしも考えないと思うのです。ですからそういう点では鄧小平というのは、いわば将来の中国の捨て石にみずからなることに最後は徹したんじゃないでしょうか。

高木 黙っていることは兎玉誓士夫よりも徹底しているからなア、なんにもいわんからね。いったらなんぼでもいえるんですよ。

例えばね、ぼくならこういうなア。つまり三つのカナメ、あれは「カナメは一つ、社会革命以外ない」と、毛沢東がいましたね。

中嶋 「階級闘争以外ない」と、ね。

高木 あっそうか。ところがね、毛沢東主席は前の文革のとき何いつているかというね「革命を把み、生産を促す」といつているでしょう。両方ともカナメだといつているわ

だなアと感じていたときに――。

高木 あのときは劉少奇がね、孫文生誕百周年の準備委員長だったんだからね。

中嶋 そうなんです。(笑)

高木 それやめちゃつて、三十何番目だよひな壇の序列が。二番目か、三番目にいたのがね。(笑)

中嶋 そのときにね、高木先生もご記憶だと思えますけども「革命家は晩節を全うすることが大事である」と周恩来がいつたときに、孫文の例を引いていつたわけですけど、劉少奇はイライラしてタバコを吸いはじめた。人民大会堂というところは禁煙なんです。日本の国会議事堂の中と考えればいい、それを二本もタバコをプカプカ吸いました。そのときの鄧小平はね、非常に印象的だね、聞く耳を持たないという顔をして、そっぽ向いていましたよ。

高木 そうだな、そっぽ向いて。

中嶋 それはまさに鄧小平の政治的なしぶとさと個性ですね、それこそ今回悔い改めないというんですが、まさに同じように出ていたと思いますよ。なんか清華大学の鄧小平批判大会で「自分は老人で耳が聞えないから、みんななにをいつているのかさっぱりわからない」といつたことですね。(笑) これは非常に面白いと思うのです。ともかく鄧

けでしょう。てめえはこの二つカナメがある

ということをいつてね、もうそれを忘れていいのかね、あれ。どういふことだろう……。ちよつとね、それじゃ前のあれはどうしたと、こういいますね。もつといたいこといっばいあるんだろうけど、何もいわないんだね。これはね、相当のね……。

中嶋 大した人間ですよ。鄧小平という人物は……。私は、高木先生と御一緒に、鄧小平について非常に思い出深い場面があるんですよ。一九六六年の十一月でしたけれども、ちょうど孫文生誕百周年記念が人民大会堂で開かれましたね、ところが文革が始まったばかりで紅衛兵がいつばいいまして、いよいよこれから劉少奇、鄧小平の名指しの批判が始まろうとしているときです。その人民大会堂の雰囲気でもうそれがだんだんと読み取れていた。壇上でも鄧小平と劉少奇は別のところから壇上上がりましてね。高木先生なんかはこう周恩来と一緒に話なんかされて、われわれも一緒に写真を撮りましたけど、そこにはいわば、当時周恩来も文革派にかけたわけですから、残っていた。劉少奇、鄧小平なんというのは、あの時点では別のところから壇上上がった、新華社のカメラマンなんかは彼らには全然スポットを当てないんですよ。いよいよこの二人が批判されるん

小平というのはたいへんな人物ですよ。あの意味では劉少奇以上の人物かもしれないですよ。

私は、今回見まして、党中央は昨年の夏から鄧小平が陰謀をくわだてたというのを盛んにいうんですね。昨年の夏に右からの巻き返しが起こったんだとか、盛んにいうんですよ。

高木 杭州事件じゃないの？

鄧小平はなぜ失脚したのか

中嶋 そうなんです。去年の夏何が起こったかという、やっぱり杭州事件なんですよ。これは、いつてみれば労働者の賃上げ要求、ストライキですね。むしろ鄧小平路線からいうと、杭州事件みたいな社会的な要求をくみ上げていこうということになる。そのためには、いわば経済建設を進め、物資的刺戟政策を遂行しなければいけないという立場ですね、これが一つ非常に大きくからんでくるような気がするんです。杭州事件でもっていろいろなことがわかってきた。

それからもう一つは、羅瑞卿の復活がちゃうところですね。これもご承知のように羅瑞卿というのは、林彪とコンピネーション

を組んでいた軍の総参謀長ですけどね、そして文革で失脚して、盛んに批判されて引きずり回された。それが去年のちよつと建軍節に復活しましたね、これも右からの巻き返し。去年の夏起こったという一つの理由であるような気がするんですよ。

ところが依然としてまだまだその時点としては鄧小平だって健在でしたし、むしろ第一線に立つて活躍してました。それで最近の論調にいわく、去年の十月に毛沢東は鄧小平をやつてつてはいけないという指令を出したというんですね。しかしながら十月の時点では、まだまだ鄧小平は活躍をしているんですよ。だってフォードが来たのは十二月の初めですよ。あのときはホスト役に鄧小平がずーつといつていて、あのころは、なんかキッシンジャーでしたつて、毛沢東は鄧小平を後継者だといつて紹介したといつているわけですからね。それがだんだん、状況がおかしくなつて、最近の『人民日報』によると、いかにも周恩来が病気になることをいいことにして、かつての持病を持ち出して文革のカタをつけようとしたと。つまり周恩来の病気がいよいよ深くなつていくに従つて、鄧小平自らの個性を発揮し始めた、という書き方なんですけれども、あるいはそうかもしれないですね。

そうしますと、やっぱり一月は一つの分岐点になるわけで、なんか一月初旬にアイゼンハワー大統領の息子が北京で要人と会っていることですね。毛沢東は元旦に二つ詩を発表したんです。その詩は、つまりこれから大激動が起ころうとしている、という詩なんですけどもね、それをみんなが唱和したにもかかわらず鄧小平はそっぽを向いていた、などといわれるんですね。そうするのだいぶつじつまが合ってくるんです。そして周恩来首相が亡くなったのが一月八日でしょう。にもかかわらず鄧小平の力はあったと思うのですね。

編集部 その時点のことは、どうもよくわからないうんですが、周恩来が生きていたときの鄧小平との関係ですね。周恩来が生きていたから鄧小平は批判されなかったわけですか。

中嶋 そうです、あるんですね。それはもうそうなんです。文革派からいわせれば、周恩来首相の病気がいよいよ深まって、鄧小平が自分勝手なことを始めたともいえるし、それから逆にいえば周恩来が生きておれば、鄧小平はあんな運命にはならなかったということは明らかですね。周恩来がやっぱり鄧小平をかばっていたんですね。だって鄧小平がこんどやろうとしたことは、周恩来が去

年の全国人民代表大会でいったことそのままですよ。四つの近代化とか、ね。

そういうふうと考えてきますと、やはり一つのターニングポイントはね、周恩来の葬儀をめぐる問題ではなかったかという気がするんですね。というのは一月八日に周恩来首相が亡くなって、それで故人のお別れの会が労働文化宮で行われて、もう一回追悼式という葬儀が遺体を茶毗にしたあと行われているんです。

ところが今回のいくつか出たスローガンの中に、周恩来の遺体を保存して置きたかったけれども、文革派は茶毗に付しちゃったというふうなことも出ているそうですよ。それは一つの例なんですけど、とにかく周恩来の葬儀をどうつかさどるかということも大きな対立点だったように思うんですね。これは私も高木先生のほうの領分ですけれどこれも中国人というのには、依然として冠婚葬祭には非常に敏感だということですね。それで私を感じたことは、鄧小平が弔辞を読んだということです。十五日の葬儀のとき、鄧小平だけが弔辞を読んだ。

これはやはり、文革派にとっては、彼らに何を感じたかといえ、毛沢東が亡くなったときも鄧小平が弔辞を読んだらたまらないという気持ちにもなったでしょうし、そしてこ

まで鄧小平が復活してきたことを象徴しているような事件ですよ。それで私は、鄧小平の読んだ弔辞というものをよく読んでみたんです。これが実に奇妙な弔辞でしてね、周恩来の前半生には非常にくわしく、一九二七年にどこでどういうポストに着いたとか、南昌の蜂起に活躍したとか、全部くわしく触れているんですよ。ところが建国後についてはサーッと流しちゃいましてね、しかも文革については非常に簡単に触れているだけなんです。文化大革命という言葉は一回か、二回出てきますが、最後は「近代的な国家を創るために奮闘しよう」という言葉で結んでいる。

つまり鄧小平の立場から周恩来の生涯を総括し、そして周恩来の政治的遺産を継承しますということをやったような弔辞なんです。これが、これが、文革派にとってはまずコチンときてね、彼らは非常にいら立ったと思うのですね。

高木 それは鄧小平の本音だわ。

中嶋 私もそんな気がするんです。

高木 それはそうでしょうね。それで、鄧小平が復活してきたときも、ぼくら驚いたけれども、これは逆もどりにしたというよりも、周恩来やったな、という感じでした。結局中国の問題というのは非常に面倒臭いんですけどね、たとえば中島先生でもぼくでも、と

かく中国のような状況の中で近代国家をつくり、経済的にも強くなり、また軍事力も強くなってソビエトと対抗出来るようにならなければいけない。それにはどうしたらよいかということになったら、当然これは中国の文化大革命のときに問題になった「専」というやつ、つまりテクノクラート、技術革新ですよ、これをしないとダメなんですよ。これがいちばん手取り早いし、それでないとお互い相手があることだから、こっただけゆつくり穏歩主義で社会主義革命やっていったってダメなんだから。だからそっちの道へ行くでしょう。劉少奇がその道を歩いていたわけ



高木健夫氏

だ。それがこんどは鄧小平でしょう。走資派というけれども、資本主義の道を歩くというけれどもね、資本主義の道も社会主義の道も近代国家の建設ということになったらね、イデオロギーを抜いたらやり方はおなじですよ、そりゃ。そうでなきゃ強くないもの。だからぼくは、鄧小平のやり方もよくわかるし、またそれをもう一度復活させた周恩来もよくわかる、いいと思うんですよ。また途中においてさすがの毛沢東スピリチュアルも、とにかく両方やらなければならぬということは何度もいつているわけですからね。

中嶋 今回のいろいろな批判の中でも、特徴的なのは中国には鞍鋼憲法というものがあるんですね。これは、いわば中国式の、毛沢東の「紅」の立場から鉄鋼生産さえもやるんだという、そういう立場の毛沢東思想に立脚した工業生産の一つのモデルというか、指針があるわけですよ。これに対して鄧小平は、マグニトゴルスキー鉄鋼コンビナートの憲法を持ち出したと書いてあるんです。マグニトゴルスキー鉄鋼憲法というのをぼくは知らないんですけど、おそらくソ連式だと思うのですね。これを本当に鄧小平が持ち出したのかどうか知りませんが、これはまさに『人民日報』の社説に書いてありますからね、私

は非常に興味深いことだと思うのです。私は何も劉少奇にしても、林彪にしても、鄧小平にしてもソ連派だとは決して思いませんけども、結果的には鄧小平などは、ソ連のたどってきた道をかなり意識していたように思う。比較的というのか、それを模倣するわけではないけれども、だいたいその点での批判が鄧小平に対する批判としてはあったんではないでしょうかね、そう思うんですが……。

高木 ぼくは、劉少奇、林彪というのは、どうも体質的にソ連派のような気がしてならないんだかね。

中嶋 なるほど。組織的には、私はそうだとおぼやかなく思っています。その辺については、私、二月にソビエトに行つてまして、びつくりしたことはですね、ユリエフというソ連名の中国人の有名な中国学者がソ連の科学アカデミーにいますけれども、あれほど対立していながら中国の品物が、新しい酒でもなんでも彼のところにはあるという話を聞きましたね。その辺はわからないでもないアという気がした点ですね。

それからご承知のように王明ですね、一昨年の春モスクワで死にまじして、王明の墓が非常に立派に出来ているんですよ。私はたまたま去年モスクワからウランバートル、北京と旅行したんですが、そのときボデビッチ修道

院のソ連のいわば名士たちが並んでいる墓に行きましたら、王明の立派な墓があるんですね。その墓地に葬むられるだけでたいへんなことらしいですけれどね。王明というのはたいへんな男丈夫というか、周恩来に劣らないような堂々たる男前の写真がありましたね。こんど行って見ましたらもっと大きい等身大よりも大きい胸像ですよ、それがフルンチョフの墓の近くに出来てたんです。だからソ連というのは、いかに王明を大事にしたかということですね。

高木 それをもっと警戒しているのが、これももともと体質的に毛沢東なんですよ。中嶋 そうでしょうね。高木先生は去年、あるいはおとしに北京へ行かれたときは、どれくらい滞在されたのですか。

高木 だって彼の革命活動というのはそんななもの、ずーっと初めから。そういう点では、周恩来とも異質ですよ。

中嶋 そうでしょうね。高木先生は去年、あるいはおとしに北京へ行かれたときは、どれくらい滞在されたのですか。

高木 三日から一週間くらいです。中嶋 それじゃ割合市内の見物なんかさされたでしょうね。

高木 ええ、やりました。

中嶋 私も去年の一月が最後に二度目なんですけども、中国の東風市場なんか、それから東車や西車のマーケットなんかに行くんだいぶ品物が出回っておりますね。

高木 そうですね。

中嶋 これはやっぱりびっくりしました。高木 だからあれだけのものが出ていて給料が同じだったら、やっぱり杭州事件のようなものを起こしますよ。

中嶋 まさにそのとおりですね。

編集部 そうするとこれから品物が出なくなるということがありますか……。

中嶋 やはり出るでしょう。もうこれは出ますし、私が非常にびっくりしましたことは、香港へ行きますと、国家公司というのがありますよ、中国系のデパート。この高級品の売り場とか、衣料品の売り場、それと同じものが北京の市場に自由に出ているんです。それはやっぱりね、中国も、いわば周恩来が去年の人民代表大会でいったけれども、衣食はとにかく足りたと。これは偉大なことだと。これはまさにそのとおりであって、や

つぱり衣食が足りた後に出てきた新しい問題なんです。今回の杭州事件にせよ、走資派批判にせよ。そこでもっと質の高い、もっと中国社会全体を豊かにするために、どういう方向をとったらいいかということ、鄧小平が走資派としての使命観にそこで徹したと思うのですよ。

そこで毛沢東の場合には、いわば貧困のユートピアですから、そこに大きな食い違いがあったと思うのです。貧しさの中に理想を求めるという毛沢東の考え方と大衆の欲求というものがどこかこうズレてしまっている。そのズレに気がつかずに「紅」と「専」の、「紅」とか、階級闘争を強調するところに、いわば民衆のほうが若干耐え切れなくなったというようなことを、私は去年の旅行のときに感じたわけですね。

「貧困のユートピア」はいつまでつづく？

高木 文化大革命の前に革命の後継者を養成するという運動がありましたけれどもね、あれがぼくはたいへん必要だと思ったのは、もう解放のときに生まれた人たちが三十前後で中堅ですね、国家建設の、ね。そういう人たちは苦しい生活というものを何も知らない

んですよ。それで世の中こういうものだと思ってきたわけです。それがいまの中堅層になっているわけですね。こういう人たちは、昔のことをどんなにいわれたって自分たちの体験のほうが大きいですから、物質的な刺激にあえばやっぱりそれなりの反応をするしね、もっと生活水準を上げようとする人もあるだろうし、こんなに良くなったのに、給料は昔のままというのはおかしいじゃないか、というような貧困のユートピアの域というのは持てないようになっていくわけですよ、いまは。そこに、毛沢東の理想主義の悲劇があるような気がしますね。

またね、昔の小作なんかでいじめられていた人というのは、生きてはいるけど、それでいろいろ説教したり、小学校の先生になつたりしていろいろやっているけれども、大した説得力というものは持っていないわね、これは実際の生活においても。だからこれからはやっぱり非常にむずかしいと思いますよ。

それで劉少奇の政策でそれが進められていったんですけど、さっき「紅」か「専」かというのがありますけど、「紅」というのは思想で精神主義だから毛沢東主義、「専」というのは技術ですね。この「紅」か「専」かというのは、昔から中国の社会主義建設の上の非常に大きな論争のテーマでしてね、その「専」

のほうをやってきたのが劉少奇であり、最近では鄧小平ですね。そして「紅」の親玉が毛沢東ですよ。毛沢東と、まア文革のヤング官僚ということですね。

中嶋 ところで私も去年、向こうの招待で

はなかつたんですが、北京に一週間滞在しまして、その代わり自由にどこでもぶらつくことが出来ました。裏町も歩きました。高木先生の『北京横丁』を愛読したものでしたら、実際、北京の胡同は変わってませんね。

高木 あのとおりでしよう？

中嶋 ホントそうですね。

高木 ことに北京の北の方はほとんど変わってないんだ。

中嶋 そうですよ。ね。

高木 昔のとおりよ。北京飯店やなんか長安街には新しいビルなんか多いっぱいあるんですよ。でもそういうものじゃないところはね、北京の北側に北京の昔ながらのあれがずーっと残ってあるんですよ。

中嶋 全くそのとおりです。私は、北京飯店だけは非常に立派。だから長安街だけを見ていたら、それはたいへんに立派ですけど、ホントにまだ住に関していえば、住居も、都市造りも全く昔のとおりです。それで、たと

えば東廠胡同、例の対支文化事業部のあった、黎元洪や胡適が住んだりしたところですよ。

よね。そこは確か槐の木が十本ぐらい並んでいるといわれていました。ぼくが行ったら六本しかなかったんですけど、この違いだけですね、あとは全く高木先生が書かれていたようなたたずまいと同じなんです。

それから鼓楼の近くね、旧鼓楼大街とか、昔、鼓を鳴して時を告げたんですけどね、鼓楼というのはちやうど日本でいえば浅草みたいなところでしょうか。あの辺なんかは、ホントに昔のまんまという感じで、もともと私は昔のことは知りませんがね。

高木 鼓楼というのと、日本でいえば、やっぱり護国寺あたりだな。

中嶋 でも護国寺あたりもだいぶ開けちゃったからね。ま、そんな感じですよ。その辺なんかも、ホントそのもの。

高木 昔のそういう家のほうが夏は涼しくて冬暖かいしね、非常に暮しいんですよ。ビルのホテルなんかよりもずっといいんですよ。それがまだ残っているんだな、北京という所には。いまの若い日本人はね、なんだこんなところ残ってるじゃないか、ゴチャゴチャした貧民窟みたいなところ、というけども、そこがいいのであってね。

民衆の政治意識は 変わった？

中嶋 鼓樓のあたりを歩いていまして、私は全国人民代表大会が近いということを実感したんですよ。というのは鼓樓のあたりというのは外人が全然行かないところなんです。しかしその一角だけに第四次全人代表会の開催を祝賀して迎えようというステッカーがたくさんあるんですね。おそらく町の中で代表を選んだんじゃないかという気がするんです、あれを見ていて。それでそれは一月十三日の日、実際にはもう全人代が開かれているんですよ。で、日本に帰ってからその発表を見たのですけれども、だから北京をたつときには、もう全国人民代表大会は開かれているか、あるいは開かれるんじゃないかということを非常に実感いたしましたよ。

で、若干自慢話になるんですが、そういうふうにして帰って来て、北京で、さっき高木先生も新聞記者のことおっしゃったのですが、ある新聞記者に「実は鼓樓の近くで、こういうステッカーを見たんだ」と話したらね、北京特派員が、その人が「鼓樓ってどこにあるんですか」と、こう質問してくるわけですよ。ぼく、これにはギャフンといたし

ましたね。(笑)だから北京特派員といっても、意外に長安街とか、天安門前広場とか、あの辺ぐらいいしか歩いていないのかなと思っただけですけども、ちょっとね……。

高木 小説にはいくらでも出てくるんですけどねエ。

編集部 中国の民衆の意識というのはどうなんですか、そのまま残ってるんですか、それとも……。

高木 いまぼくら、それをあげたらついているわけですけどもね、私は中国の民衆の政治意識というものは、手をあげて答えるという意味ではものすごく高いと思うのですよ。だつて一週間に二回ぐらいい学習をやらされてるし『人民日報』の社説を読んでお互いにディスカッションをやらされているしね、とにかくもうじつとしていても政治意識は高くなりますよ。つまり中国の社会主義のワクの中の政治意識は高くなる。だけれどもこんどの天安門事件なんかを見るとね、さっき中島先生

がいわれたようなね、中国人の昔の祖先を崇拜し、亡くなった人を敬慕するというそれが非常に強く残っているということですね。迷信とか、そういういろいろなものの中は中共政権が追放したりしましたけども、しかし清明節だけは、祖先の墓を掃除して、そして革命烈士の生前の物語を聞く日、勲功を偲ぶ日と

いうことになっていっているわけですよ。だからそれを持ってきたわけだ。周恩来首相をあれする清明節に……。それが翌日、花輪などでいっぱい埋っていたものがとられちゃったわけでしょう。その花輪や何かと一緒に壁新聞なんかいろいろあって、さきも話が出たような江青に対する当てこすりの壁新聞だとか、ま、いろいろあったわけですよ。

それで、これが走資派、鄧小平、その他の陰謀だということになったわけですよ、あれがね。人民広場のね。周恩来の花輪を撤去したら、ワーツと暴動になったということですけども、ま、あれだけの組織をすることしたら、ぼくは、資本主義の道を歩む反革命派というのには相当な勢力を持っていると思うのですがね。とくに台湾あたりがこれを非常に高く評価しているのですよ。もうたいへんなものですよ。「それ、一時その機会を得た」ということだね、いうわけですよ。

編集部 質的には違うんじゃないですかね。

高木 いやいや、台湾が憤慨する、あるいは意気込みというのはよくわかるんですよ、私は。別に見当違いではない。さっきもいったようにああいう状況の中でああいう民衆の暴発が起こることとはちよつと考えられない。暴発をやってもですね、あとはどうな

るかということとは彼ら身に染みてよく知っているわけです。みせしめというけれども、よく見ているわけですからね。だから自分がどんな目に遭うかということはよく知っているわけですよ。そういうところをただ見ていただけでも、巻き込まれてやられてしまう。それでもなおかつ見ているということは、ぼくはたいへんなレジスタンスだと思のですよ。

それと『人民日報』だったか『紅旗』だったかの社説が、その辺の状況をこつ細かに書いていっているんですよ。

中嶋 そうそう、書いておりますね。

高木 それは社説ですよ。そこに、やれひきちぎったの、ぶん殴ったの、いやもうなん



だか知らんけれども、乱闘の模様をこつ細かに書いていっているんだよね。それが社説だから、ぼくは驚いたなア。ぼくは、あれで天安門事件の細かい状況がよくわかったようなものでね、そういうことなんですよ。

中嶋 いちばんくわしいのは『人民日報』記者なんか書いているものですよ。

高木 それが日本の新聞を見たんじゃないやさっぱりわからねエ、何いってんだか。ちよつと『朝日』がケガしたとかなんとかいうくらいでサ、そのケガしたヤツがどういふふうにかゲガしたのかいって来ないからさっぱりわからないのだよね。なのに、ちゃんと向こうさんのほうで社説に書いてきてくれる。

中嶋 やつぱり中国の『人民日報』の社説のほうで、むしろこんどの事件をそのまま白状しておりますね。

そういう意味で私は、やつぱりさつきも、お話しがちよつともどりますけれども、これは文革当時はこういう性格のものは起こらなかった。文革をやったにもかかわらず民衆の意識というか、中国人の生活の向上というか、そのテンポといまの政治とのあいだのギャップというものがその背景にあると思えます。それで、過去と比べると中国は確かに非常によくなつてきているわけですから、それ

国のお客さんというものもだんだんと増えてくるし、杭州とか、上海とか、そういう都市にはだいぶ外からの風も吹き込んで来るでしょう。それから走資派といわれる鄧小平にしても、そのものを押えている経済関係にしても、かなりいわば解明派ですよ。外国との比較をする。将来の中国を考える。

生活レベルの向上

そうするとやつぱり富国強兵策をとらざるを得ないということになるんですね。彼らはそれを一生懸命やったということ。そこを民衆もかなり支持したんじゃないかと思うのはね、私は、あちこち胡同も歩いたり、それから名所なんか訪ねまわしてね、そういう一方における中国の変わらなさといいますが、普遍的なものと同時に、たとえば日曜日なんか公園を歩いてますと喜んで写真を撮っているんですよ。カメラブームなんですよ。もちろんカメラといつてもカラーじゃないんですよ、日本のように。中国製のカメラで、そりゃ質が悪いかもしれない。だけどカメラを買おうとすると、あれは確か二、三百元するといつていましたよ。かなり高いです。そうすると一般の中国の労働者の給与というのは、

北京あたりでも六、七十円ですよね。ということになると数カ月分の給料をはたかないと小さなカメラでも買えないんですよね。

したがってだんだんと生活の質の向上を求めようになる、あるいはカメラに手を出したくなるし、自転車なんかでもサイクリング用のようなきれいな自転車が出回ってくるわけですね。そういうものを買おうとなるといまの毛沢東思想に基づいた「貧困のユートピア」というものからどこかズレてくるんですよね。

ですから今回の事件というものは鄧小平的な事件であると同時に、中国の将来に対する非常にたくさんさんの宿題を残した事件だというふうな気がしますね。

高木 「農業は大寨に学べ」の大寨をやっていた陳永貴ね、この人委員長をやっていたんですけど、彼とぼくは一日中しゃべっていたことがありましてね、彼は非常に優秀な人で、これは毛さんの喜びそうな人物だなアと思ったんですけど、副総理になったでしょう。これでよかったですなアと思っていたら、さっぱりこんどは出て来なくなりましたよ。大寨会議のときの演説では華国鋒なんかもやっていたでしょう。彼も演説したんですけど、彼の演説は出なかった。彼は、つまり「三つのカナメ」をいったらしいんだな。

中嶋 そうそう。

高木 どうもそれじゃないかと思っただけだね。

中嶋 そうですね。

高木 ぼくは、かわいそうだよ、あの百姓のおっさんが。これ、いいと思ってたんだよ。彼もそう思っているはずだ。いいに違いないから。

中嶋 『人民日報』も当時は「三つのカナメ」についていつているんですよね。しかも同じ副総理である鄧小平も同じようにいつているわけですから。

高木 それをいつたからという理由だとしたら、陳永貴の消えたのがわからん。あれはいいおっさんで、こういう人が政治の表面に出てきたら、これは中国にとっても明るい印象を外国に与えていいんじゃないかと思うんですよ。ホントになんにも知らない、サインしか出来ない人なんですけどね、字がわからなくて。しかし文革の最中に大寨へ行っているの聞いて、また見て、あのころは皆が説明するのは「毛沢東があいつだ、こういつた」というでしょう。その後がまた細かいんです。彼、何もいわないんだな。てめエのこただけですよ。大寨でどんなふうな苦勞をした、ということぐらいのものですよ。それだけしかいわない。それで最後に「あなたは、

毛沢東をどう思っておりませうか」というと、

「あの人は偉い人ですわ」というんだね「その偉い人の言葉をあちこちで聞いたがあなたからは一言も聞いてない。どういうことですか」というと「だって、わたしのしたことは毛さんのいったことちつとも変わっていないし、いうことないですよ」というんだね。

中嶋 非常に逆説的なことですね。

高木 でも大したものですよ。あれは優秀だと思つたなア。ザーっとトントンと行ったんだけれども、山西省の中央委員をやっているのがちよつとよかつたのかね……。副首相はちよつと早かつたかね、あれ。しかし早くもないよね、あれでもう六十だからねエ。

中嶋 高木先生は華国鋒についてはどうお考えですか。

高木 なんにも知らないんだ、あれについては。やつぱり毒にも薬にもならない男じゃないかね。

中嶋 さつき高木先生おっしゃいましたけど、どうもあの時点で、制度的には鄧小平が副総理の一等格でしたから、彼が当然首相になるのが当たり前ですよ。にもかかわらずそれに抵抗が起こつて、しかしながら文革派としては、洪文ではあまりにも敵が多いしね、嘴が黄色い青年であるという、それから江青婦人に対する身回りだというふうなあれからこんどの事件があり、鄧小平を切つていく過程でもあまりにも無理が多かつただけだね、どうもそういうことが、もちろんそのとおりになるとは思いませんけれども、一つのアナロジーとして考えられるような気がするんですね。

高木 結局鄧小平を使つたということは周恩来首相の一つの間違ひではなかつたかなアいまになって思えば……。

中嶋 そうですかね。

高木 彼以外ないということじゃないんだからねエ。李先念だつていいんだし……。

中嶋 私は、そういう意味で鄧小平びいきがもしありませんが、ただ鄧小平は若干自己顕示欲が強過ぎてね、政治の戦略をもう少しじっくり構えることを知らないような気がしますがね。知らないというのとあれなんですけど、周恩来ほど下の方へ沈潜するというかね、つねに自分を出しちゃうでしょう。だからあいつのいつていることはいいけど、あいつにはついていけないという雰囲気若干中国の中にあつたんじゃないか、という気がしないでもないんですかね。

高木 軍が一致、支持ということはどういうことなんでしょうなア、あれは……。

中嶋 でも、それにしても私は軍はどうも林彪事件以来政治に介入したくないという消

ソ連のたどつた道を中国も……

中嶋 そうしますと、こういう勝手なアナロジーというか、スペキュレーションが許されるかどうか知りませんが、スターリンの末期にペリヤが台頭しましたでしょう。これもやつぱりご承知のように秘密警察ですよ。

高木 違う、違う。あれは、むしろ毛さん好みだよ。

中嶋 そうそう、毛さん好みの無骨な男ですよ。土臭いにおいがするという、まア……。

そこで華国鋒がはたして湖南の出身なのか、あるいは山西なまりが強いというので湖南ではないという意見もあるんですがね、まア湖南で主に活躍していたのは事実ですから。ということになりますと、どうも彼は毛さん好みの人間でそれはそれでいいんですけども、やはり公安を握っているでしょう。

高木 そうです。そりやそりや。

中嶋 ここにもう一つの問題があるんですよ。

高木 そりやそりや、そうそう。それがもっとも強いや。

極的な態度がずーっと見えますから、こんどの支持というのは、ああいうことになればとにかく表向きは支持せざるをえないんじゃないでしょうか。

高木 中島さんは中国を外から見ても、たとえば東南アジア、インドシナ、ソ連との勢力争いみたいなもの、それから西部地区のちょっととした緊張ね、それからアメリカとソ連の中国に対する態度ですね、これらはかなり大きいんじゃないかと思うんですよ。やっぱり中国の国内情勢で実際に揺れ動く可能性はありますね。

中嶋 そうでしょうね。

高木 ぼくは、最近ソ連がかなり積極的じゃないかと思うのですよ。

中嶋 そうです。非常に積極的だと思いますね。

高木 西北地区なんかはとくにそうだし、そのほかの中ソ国境の問題にしてもね、つまりあそこ常備兵力の四分の一ぐらいは国境にさいているんじゃないですか。そうだとしたらたいへんですね、これね。中国は、軍事技術からいっても何からいつても、向こうからワツと来られた場合、正規軍じゃもう引くよりほかしようがないんだからね。あとは人海戦術で耐えるよりほかしようがないでしょう。どうせ初めからそういう方法を取って

るんだろうけど。それじゃ解放軍としては、それこそ全くめんつの問題ですね、これは。

中嶋 私はモンゴルに行きまして、つぶさにこの目で見たのですけれども、国境以北は完全にソ連の基地です。至るところにアンテナ基地ね、バラバラアンテナというんですか、それからリーダー基地ね、ゴビ砂漠の中を軍用ジープが走るわ、ヘリコプターは旋回するわで、完全にソ連の基地ですね、モンゴルというのは。

だから日本のためにも、むしろ鄧小平のような走資派というか、実権派というか、中国の内政を固める手ごわいという意見があるけれども、とにかく中国がこんなふうに国内の混乱を繰り返していると、ソ連が非常に強気ですからね、私は、もうちょっと安定してもらわないとアジアの安定のためにも困ると思うのですよ。その点からしても今回周さんが亡くなった後にこういう形で走資派を追い詰める必要があったかどうかね、大いに疑問です。そこまでせつばつまつたのでしようが、ちよつと無理をしている……。

高木 つまり中国のソ連を中心とした国際情勢の展望をしていく上で、決して楽観的でめエのとこの国内でいるんなものをガタガタやっつけてそれでいいとは思っていないわけですからね。非常に緊張感がまだあるんだ

から。

中嶋 もう二、三べんはいろいろな揺れ動きがあると思います。しかしながらそういう中で周恩来なき周恩来路線というか、あるいは鄧小平なき鄧小平路線というか、ぼくは、どうもそういうものがなかなか消えないような気がするんですがね。

高木 何度も何度も出てきますよ、これはどうしたって。

中嶋 最後に一言申しますとね、私は、天安門事件というのは社会主義国でも、いまのような形の暴動はなかったわけですよ。

ハンガリー事件とか、あるいはポーランドの事件というのは、スターリン体制が崩れたという状況の中で初めて出てきたものですよ。で、毛沢東が健在で、しかも毛沢東体制というものが、とにかく曲りなりにも水も漏らさぬような状況であるというような中でこの事件が起こったということの深刻さね。ですからその背景には、やっぱり毛沢東批判とはいわなくとも毛沢東の政治への批判があったという点で、ぼくは今回の事件はきわめて重要な意味を持つと思いますね。毛沢東以後への大きな課題を中国に残したといえるんじゃないですかね。

編集部 それではこの辺で。どうもありがとうございました。

邦連人間

六月号

昭和五十一年八月一日発行第八巻第六号(田月二回)一日発行
昭和四十四年十一月十日第三種郵便物認可
昭和五十一年十二月十八日国鉄首都特別旅客線雜誌第五二九号

■座談会特集■

I 建国200年のアメリカ

猿谷要・荒垣秀雄・古谷綱正

II 中国最近の動向について

中嶋嶺雄・高木健夫



1976 Feb '76

W. S. G. G. G. G.

Moriyoshi Dolni

新
生
社